

事業目的

- あらゆるこども・若者が誰でも気軽に利用できる居場所の設置・運営【理念】
- 居場所がなく孤独を感じる、あるいは孤立しているこども・若者がバーチャル空間での交流などを通じて、安心して気持ちを表現し、自分のことを全てさらすことなしにつながって、自分らしくいられる【主なターゲット層・目的①】
- スタッフと信頼関係を構築し、抱える困難の深刻化の予防や早期対応を図る【目的②】

利用実績

8月以降は全日程を登録不要のオープンデーとした。

	利用者(延べ人数)	登録者
令和6年10月	99名	21名
11月	102名	16名
12月	71名	27名
令和7年1月	41名	5名
2月	30名	23名
3月	19名	16名
4月	9名	10名
5月	45名	10名
6月	33名	11名
7月	48名	34名
8月	116名	20名
9月	86名	20名
累計	699名	213名

利用登録者の傾向

性別	男	64名
	女	68名
	わからない	7名
合計		139名

各施設	さいたまユース	39名
	教育センター	24名
	その他支援機関	17名
	特になし	59名
合計		139名

R7.6.30時点の登録者139名の内訳
 ※ 事業特性による性差が生じないこと、「特になし」の割合が増加しており、幅広い層からの登録が増えてきていることが確認できたため、R7.7.1～性別・施設利用の確認を不要とした。

年代	0-5歳	1名
	6-12歳	86名
	13-15歳	48名
	16-18歳	22名
	19-22歳	10名
23-29歳	12名	
30-39歳	8名	
40歳以上	26名	
合計		213名

R7.9.30時点の登録者213名の内訳
 ※「40歳以上」では、学校教員や支援機関の職員、保護者等の登録も含む。

主な仮説①(交流・体験事業)

既存の取組では捉えられていない潜在的なニーズを、バーチャルを介在することで顕在化させることができる。

検証

<p>利用者の声</p>	<p>●小学生の子どもと一緒にデモを体験した保護者 「自分の住んでいる自治体にもオンライン上の不登校支援センターはあるのだが、少し学校っぽいので子どもにはなじまない。もっとゆるやかな居場所みたいなものがないかと思い参加してみました。」</p> <p>●30代 「ひきこもり支援機関につながっているが、他の人と一緒に参加するリアルプログラムはまだ無理があるので、自分のペースで参加できそうなバーチャルユースセンターに興味を持った。」</p>
<p>利用者アンケート</p>	<p>【質問】若者どうしの交流・体験プログラムに参加する際、お互いの顔が見える対面型と、お互いアバターで参加するバーチャル型のどちらかを選べる場合、あなたが参加したい方を選んでください。 ⇒ 「アバターでの交流・体験」72.2% 「対面での交流・体験」27.8%</p> <p>【自由記述欄】「アバターにより顔を見せる必要がないため、気軽に参加出来てよかった」「気軽にチャットなどができ、交流がしやすいと思った」</p>



結果

顕在化させることができる

今後の課題

- バーチャルの特性に魅力を感じる利用者が多い一方で、一時的な利用で、その後の利用が継続しない傾向があるため、より気軽に利用できる環境づくりが必要
- ニーズがある層に情報が届いていない可能性がある。

主な仮説②(相談事業)

バーチャルでも居場所の設置により悩みの早期相談や深刻化の未然防止を図ることができる。

検証

実績	相談実績は0
利用者の声	●デモに参加した20代若者 「オンラインに居場所があればいいという訳ではない。会いたい人がそこにいるから(リアルな居場所に)行っている。」 ●デモに参加した20代若者 「すでに相談できる(リアルな)場所があるからバーチャルで相談しようとは思わない。顔が見えない人には、相談しない。安心感がないから。」

結果

**判断するには時期尚早
(バーチャルの場合、リアルよりも信頼構築に時間を要するため)**

今後の課題

- 信頼関係構築を促進する広報周知が必要

試行運用期間実績(令和6年10月1日～令和7年9月30日)

開室日数	170日	内プログラム実施回数218回
延べ利用者数	699名	
外部有識者会議実施回数	8回	
利用者アンケート協力者数	1,089名	さいたまけん★こどものこえアンケート 1,019名(保護者含む)、利用者アンケート70名
動画広告 ※VYC全体PR	2回	YouTube広告(R7.4.17～5.11)、Instagram広告(R7.8.14～8.19)
SNS発信数 ※活動内容	77回	VYC公式Instagram 74回、県公式LINE 2回、こども応援NW埼玉Facebook 1回
訪問説明実施回数	75回	学校*、不登校支援センター、リアルの居場所事業、NPO団体等
チラシ配布枚数	18,290枚	学校、不登校支援センター、リアルの居場所事業、NPO団体、福祉事務所、保健所等

* 夏休みは不登校が心配されるところでもあるため、定時制高校等へ集中的に訪問

利用登録者の傾向

※R7.7.1～9.30

登録のきっかけ	チラシ	17名
	学校の先生	13名
	WEBサイト	13名
	SNS	12名
	体験会	10名
	支援機関	4名
	インターネット広告	0名
	その他	5名
合計		74名

事業目的

- あらゆるこども・若者が誰でも気軽に利用できる居場所の設置・運営【理念】
- 居場所がなく孤独を感じる、あるいは孤立しているこども・若者がバーチャル空間での交流などを通じて、安心して気持ちを表現し、自分のことを全てさらすことなしにつながって、自分らしくいられる【主なターゲット層・目的①】
- スタッフと信頼関係を構築し、抱える困難の深刻化の予防や早期対応を図る【目的②】

目指すべき運営の形

◆ 誰でも自由に気軽に出入りができる居場所

◆ 目的や成果が求められない余暇活動の場や、利用者が共感や自己表現を図ることができる居場所

◆ スタッフとの信頼関係があり、スタッフに会いに来れる居場所

検討要素 ○促進要素、●阻害要素

- 匿名性が高い
- オープンチャットで安全性がある
- リアルタイムコミュニケーションがとれる
- どこからでも参加ができる
- 事前登録が必要
- 開室時間に合わせる必要がある
- デジタルツール等が必要
- 保護者の安全性に対する懸念が大きい

- 匿名性が高い
- 聞くだけの参加も可能
- 利用者企画のプログラムの実施が可能
- 非言語コミュニケーションは困難
- 表現はテキストチャットのみ
- オープンチャットのため利用者間でのコミュニケーションがとりにくい

- スタッフは固定
- スタッフはボイスチャットで話しかけられる
- 事前登録時にスタッフが個別把握を行う
- アバターコミュニケーションの制約
- 講義型プログラムになりがち
- オープンチャットのため利用者の個別対応が困難

「自由」「気軽」と「安全性」の両立が課題

利用時間帯

安全性

事業の目的達成に資するユースワークプログラムの実施

プログラム内容

オンライン空間でのスタッフとの信頼関係醸成に時間がかかることが課題

利用者との関係性

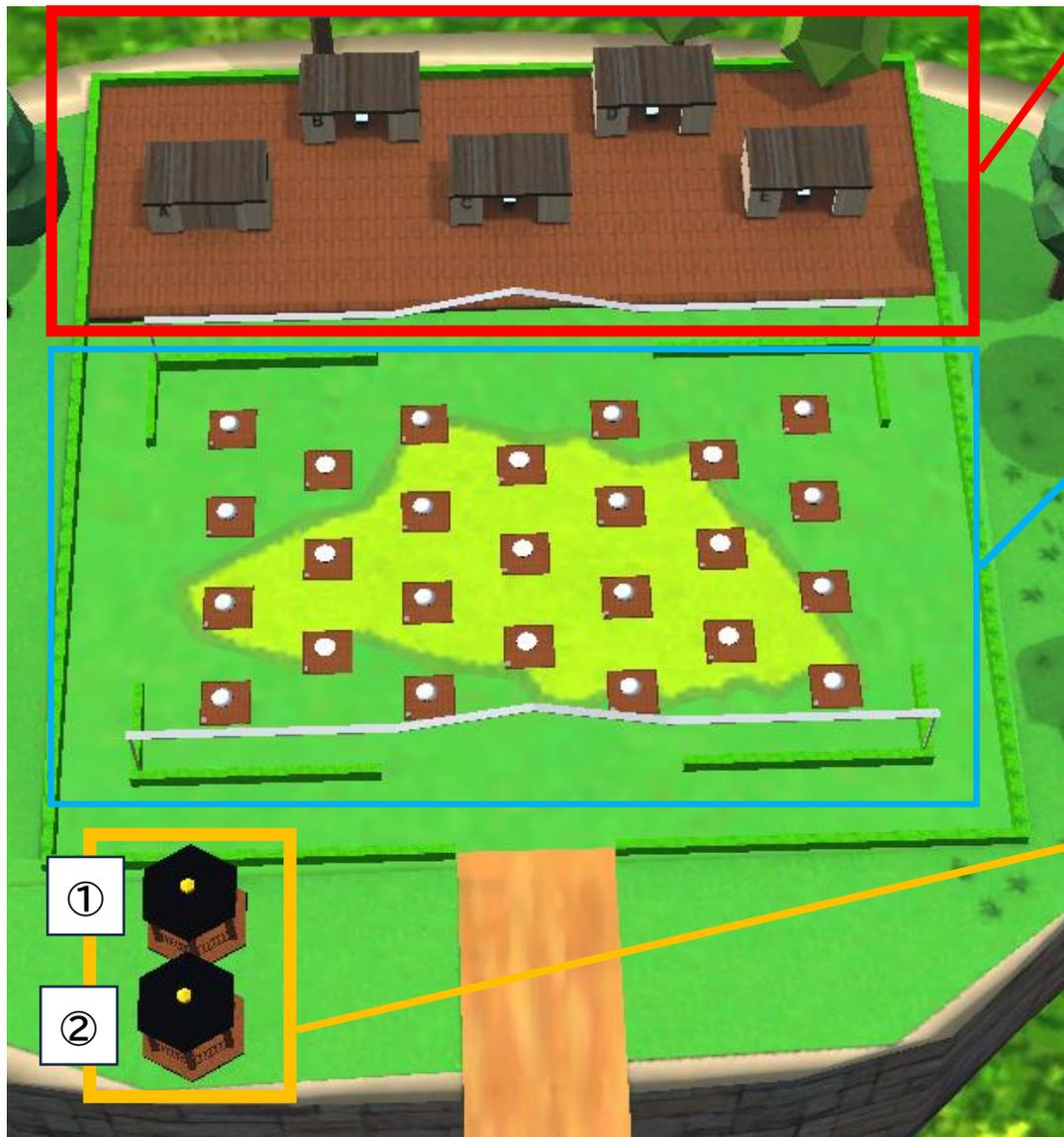
埼玉県バーチャルユースセンター・試行運用成果報告について

運用方針

事業目的の達成及び課題解消のため、安全性を担保しつつ、自由で気軽に利用できる居場所を目指すもの

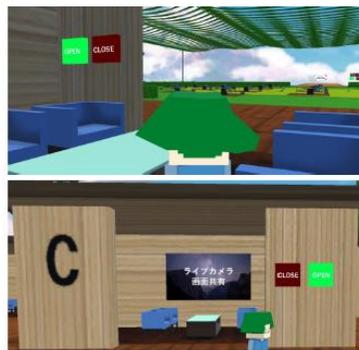
<p>開室時間</p>	<p>毎週 火曜日 16:00～19:00(小学生向け) 木曜日 16:00～19:00 日曜日 19:00～21:00</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 様々な事情を抱えた層に幅広く利用していただくため、学校が終わる夕方以降の時間帯とする。 <p>利用 時間帯</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 利用者アンケート 参加しやすい曜日は「日曜日」「土曜日」が多い。 参加しやすい時間帯は「18～21時」が多い。 ● 試行結果 様々な時間で開室を試したが、特に有用な時間帯はなかった。
<p>利用方法</p>	<p>事前申込・事前登録不要</p> <p>安全性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 利用者アンケート 保護者の52.3%の方が「こどもにバーチャル空間上の居場所を利用させたいと思わない。」
<p>安全対策</p>	<p>スタッフが常駐し、チャットでの会話等の確認を行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大人数の場合はオープンチャットを徹底することで空間内の透明性を確保する。 ● 問題行動を起こす利用者がいた場合は、事前注意の上、速やかに強制退室させることを徹底する。 ● 長時間利用とならないよう、適宜休憩の声掛けする。 <p>相談エリアでスタッフや利用者間で会話を行う自由な空間 (目的や成果が求められない余暇活動の場)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 少人数の場合は外から見える場所でグループチャットを認める。 <p>安全性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 利用者の声 「バーチャル空間が無秩序な状態ではない、という安心感がほしい。」 「ネット依存にならないために、子どもへの対応策を考えてほしい。」 ● 試行結果 登録不要のオープンデーを1か月実施したが、問題は生じなかった。
<p>運営内容</p>	<p>○交流・体験事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 利用者の声を基にテーマを決めたプログラムの実施 (共通のテーマを基に、利用者間のコミュニケーションを促進) 例: テーマトーク、好きな本の紹介等 <p>○相談事業</p> <p>バーチャル埼玉相談室等を活用した個別相談 (HPから事前予約を受け、個別相談)</p> <p>プログラ ム内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 利用者の声 「自分でプログラムを企画したい。好きなものを紹介したい。」
<p>広報周知</p>	<p>Instagramの運用(週1回程度の更新)、動画による広報、デモの実施、市町村・教育メタバースとの連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ● リアルとバーチャル、両面からの広報の実施 <p>利用者との 関係性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 利用登録者アンケート(R7.7～9) 登録のきっかけは、チラシ・学校の先生・WEBサイトが多く、支援機関・インターネット広告は少ない。

相談エリア概要



相談エリア入口

鍵付き相談ブース



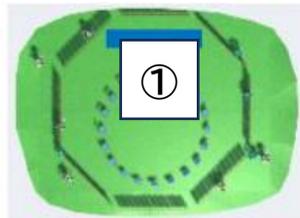
- ブース形式の空間
- ブース内にあるアバターによるグループチャットが可能
- 入り口の扉の開閉が可能であり、閉じることで秘匿性が高まる

オープンテラス

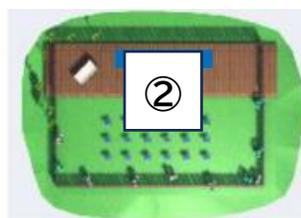


- カフェ席が並んだ広いエリア
- 席に集まったアバターでグループチャットが可能
- オープンテラスに入るための入り口は管理者権限による入場制御が可能

グループワークルーム



車座形式



教室形式

- 閉鎖された会議室風の空間
- 空間内にあるアバターでグループチャットが可能
- 小屋からグループワークルームへの転移は管理者権限による制御が可能

バーチャルユースセンターの位置づけ

